九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

宮沢賢治初期文学におけるディストピア : 「蜘蛛となめくぢと狸」を中心に

黄, 英
九州大学大学院比較社会文化学府

https://doi.org/10.15017/4494505

出版情報：比較社会文化研究. 10, pp.19-26, 2001-10-01. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：

『比較社会文化研究』第10号（2001）19～26頁
Social and Cultural Studies
No.10（2001）, pp.19～26

宮沢賢治初期文学におけるディストピア
――「蜘蛛となめくぢと狸」を中心に――

黄　　英

はじめに

ユートピア追求は宮沢賢治文学を貫く重要なモチーフの一つであり，真，善，美への憧憬及びその願望表出がその文学の中で相当の割合を占めている。が，彼の初期文学にその反対の様相，つまりディストピアに関する表現が数多く存在することも無視できない。しかも，後期文学に比べて初期文学におけるそれがひときわ多く，初期文学の特徴の一つに数えられると言われている。

ディストピアはユートピアの裏返しだと言える。その様相の解明はユートピア志向の解明と緊密な関連を持っており，ある意味では，ユートピア志向の解明にもなると言えよう。本論はこのような認識に基づき，ユートピア志向の生成階段の特質を解明する過程の一環として，初期作品「蜘蛛となめくぢと狸」を中心に，そのディストピアの様相，特質に注目し，先行論考を検討しつつ，考察していきたい。

一，「蜘蛛となめくぢと狸」のテキストについて

「蜘蛛となめくぢと狸」は宮沢賢治のもっとも初期の童話作品だと推測されている[1]。その内容はかつて混同された時期があった。いわば，最も早い時期でできた十字屋版宮沢賢治全集のテキストは「蜘蛛となめくぢと狸」と後年改作された「寓話　洞熊学校を卒業した三人」とが混同されている。そのことが小沢の調査で判明した[2]。それまでの読みは勿論混同したテキストによるものであり，基本的に，両者を合わせて読むか，或いは「蜘蛛となめくぢと狸」を補足する形で「寓話　洞熊学校を卒業した三人」を持ってくるか，というかたちで読まれていた。小沢によってテキストの混同という事実が明らかになってから，その後に出版された全集に収められたテキストは両者を区別して掲載されるようになり，読みもそれぞれ区別した本文によるものになり，しかもそれが基本的な流れになって今日に到った。本論は勿論両者を区別して掲載する『新校本宮沢賢治全集』第８巻のテキストによるものである。

まず本論に採用されたテキストのあらすじを紹介しておく。プロローグは，蜘蛛となめくぢと狸は三人とも立派な選手で，本気の競争をしていたが，既に死んだ，という書き出しで始まる。そして何の競争をしているのかを明らかにしていくかたちで，三人のそれぞれの伝記が三章に分けて述べられ，最後に，三人とも地獄行きの競争をしていたという結語で締めくくられた。

二，先行研究に対する検討及び問題提示

この作品について，先行研究では優勝劣敗，弱肉強食など，資本主義社会の競争原理への批判や風刺がその主題であるとする評価が一般的なものであり，そのなかで小沢俊郎説がその代表的な論の一つである。氏は「貧しい生活のためどうしても他の命を食って生きねば生きられぬ悲壮さとして描く代わりに，自分の食欲のため可哀相な子供の蚊やめくらのかげろうを食って肥ってゆく貪婪さとして描いている」と述べ，「なめとこ山の熊」の小十郎や，「よだかの星」の甲虫を食べたよだかなどの苦悩が蜘蛛らの行動には見当たらないことから，「賢治の態度が宗教的というよりは社会批判的であった」と判断し，そして殺生が「生存の為の原罪でなく資本蓄積の為の残忍さとなっている」[3]と指摘している。果たして，この作品の段階で，氏が言う資本主義価値観の否定は何処まで浸透していたのか。このような疑問を持ち，テキストの再検討を試みたい。

前に作品のあらすじを述べたが，ここで三人の物語をもう少し詳しく整理しておくと，以下のとおりになる。

蜘蛛の場合：風に飛ばされ，空腹を我慢して，貧しい網を掛けはじめ，最初にひっかかってきた蚊を食う。その後，めくらのかげろうを騙し食う。生存の危機を乗り越え，めでたき結婚。二百匹もの子供を生み，虫けら会相談役に推される。なめくぢや，狸が来て，悪口を言う。それが悔しくて，あちこちに一生懸命網を張りまくった挙句，溜まった餌の腐敗が伝染し雨に流される。

なめくぢの場合：立派な家を持ち，親切だとの評判がある。〈飢餓〉に耐えられず，食料を求めに来るかたつむりを

食う。その後，蛇にやられて薬を求めに来るとかげを食い殺す。蜘蛛や狸にからかわれ，病気になる。最後に雨蛙に食べられる。

狸の場合：ちょうど空腹で無気力になりかけた頃，同じく空腹さに耐えきれなくなる兎が来る。浄土に行かせると偽り，兎を食い殺す。その後，同様な手段で狼を食い殺す。お腹がむやみに膨らむ病気で死ぬ。

ここで，まず注目したいのは，三人の物語の中に，〈飢餓〉という事実が頻繁に立ち現われることである。例えば，蜘蛛も狸も空腹を堪えている姿で登場する。なめくぢの場合も，本人は裕福そうな生活をしているが，訪ねてくるかたつむりは食料に困っている。この点について天沢退二郎は早くも「『蜘蛛となめくぢと狸』の三つの挿話，三つの『伝記』がいずれも極度の〝飢餓〟の状態からはじまっていることは，見てとりやすい重要なポイントである」[4]と作品の背景に〈飢餓〉が存在することを指摘した。これは妥当な見解だと思う。この〈飢餓〉の事実に注目して，小沢の論考を検討してみたい。

蜘蛛や狸があまりの空腹のため，相手を食わなければ生きていけない，いわば極度の〈飢餓〉状態に陥ったが，当の本人たちには相手の生命を奪うことに関する罪の意識は毛頭見られない。むしろそもそもそのような行為を生きていくために仕方なく行ったのではなく，当たり前の日常営為として考えているかも知れない。よってここでは確かに小沢が述べたように，生存の原罪の意識もなく，それによる悲壮さもない。また，その後蜘蛛が悪口を言ったなめくぢや狸を見返すために一生懸命網を張りまくるといったくだりを，資本主義の悪質な競争の本質だと読み取っても可能である。とはいえ，生存そのものが脅かされる極度な〈飢餓〉状態で展開されたたくましい生のドラマまでも，ただ資本主義の貪婪の性質による資本蓄積だと見なすのは，納得いかない部分がある。

また，作品のなかで，この〈飢餓〉の理由に関する説明は一切見られない。それは説明するほどのことではない為か，それとも言うまでもないことなのかは見当つきにくいが，その理由を社会組織や，社会運営原理にあるといった暗示としても書かれていないことは明白である。勿論小沢もそもそも〈飢餓〉ということに注目しないのは，社会批判という結論を〈飢餓〉をめぐる関係事項から導き出すつもりがなかったからだろう。また「資本主義的価値観を否定するには，社会組織自体にひそむ欠陥とか，この童話のごとき小物ではないより大物の『よく眠る』資本家や高級官僚をえぐらずには描けまい」[5]と，「若い賢治の眼の浅さ」を惜しむ小沢の論調からも，小沢は賢治が既に社会批判の矢先を社会組織や社会運営原理に向けているとは見てないことが分かる。

しかし，作品中に何回も繰り返して出てくる「ひもじい」という表現，「ひもじい」のを堪えて一生懸命網を掛ける蜘蛛の姿，或いは手段を選ばずに，なんとかこの〈飢餓〉の状況を乗り越えようとする狸の姿，などを無視して良いのだろうか。そこにこめられている生きるエネルギーにもっと注目していいのではないか。これに関する詳細は四の部分に譲る。

一方，小沢説と違って，この〈飢餓〉に注目し，外部的な社会批判ではなく，むしろ人間存在の内部に目を向ける論考には萬田務説と川島裕子説があげられる。

萬田務は「極限的な飢渇状況にあって，自己の生命か他者の生命かの二者択一を迫られた時，どうしても自己を採らざるを得ないという生き物としての哀しい逼迫したエゴと，そのエゴを何としても否定しなければならないという賢治の法華経への指向性が導き出す相克葛藤の様相，すなわち〈修羅〉が早くもこの作品に表現されている」[6]と指摘した。

上の萬田説を検討するには，まず蜘蛛が最初に登場する場面を確認しておく必要があると思う。蜘蛛が空腹を我慢して，一生懸命糸をたぐり出して網をかけ，その網があまり薄くて，飛んできた蚊が網の糸を切って飛んで行こうとしたところ，蜘蛛が「まるできちがひのやうに，葉のかげから飛び出してむんづと蚊に食ひつきました」。蚊が哀れな声で謝っても蜘蛛は「物も云はずに頭から羽からあしまで，みんな食ってしまひました」。

ここで，蜘蛛が空腹のあまり，逃れそうな食物に気違いのように食いつくという行為から，確かにその際蜘蛛が目前の食物を逃したら，生命維持の危機を招くといった極限的な〈飢餓〉状態にいることは分かる。が，それは餓死か相手を食い殺すかという二者択一を迫られ，仕方なく行った営為だとは読み取れないだろう。そもそも網を張り，引っかかってくる昆虫を食うのが彼の日常的な生存形式で，別に餓死に直面する際選んだ究極な行為ではない。よって，この場合二者択一という極限の選択が存在しないと言える。従って，二者択一があるからこそ生じるエゴという倫理レベルの問題が，その発生条件がなくなる限り，自然に生じてこないことは自明であろう。さらに，後の蜘蛛がなめくぢや狸を見返すために網を張りすぎ自滅していくといった筋の展開を見ると，エゴの問題をここであげるのはやや早計であろう。

もう一方，川島裕子[7]は〈飢餓〉が賢治の認識のなかで，「社会機構の欠陥といったことに起因するのではなく，科学によって乗りこえられていかなければならない，自然のもたらした災厄であった」と述べ，〈飢餓〉の起因を自然に求めるのである。さらに，「圧倒的な自然の力によって，暴力的に押しつぶされていく生きものの哀しみを〝飢え〟とい

うかたちで幼い頃から見続け，生きることと殺すこととが表裏を成している生存という行為が宿命として背負っている悪に気づき，賢治童話はまず，この〝飢え〟がもたらす悪から書き始められたとみてよいだろう」と賢治の生き様と関連して指摘したうえで，「『蜘蛛となめくぢと狸』とは，他者を食い殺しながら生きのびていかなければならない宿命としての悪が，露骨なかたちで突出した作品であったといえる。(中略)社会批判よりもむしろさらに人間存在の深い部分で，生きものの非条理に目をむけていったと思われる」との見解を主張した。

作品の中で自然災害に関する表現はせいぜい，蜘蛛の網を吹き破ったりする風のことくらいで，これといったものが見当たらない。が，〈飢餓〉が社会組織に拠るものではないことは明白である。従って，自然災害がもたらしたものだとする見解はまず妥当だと思っても構わないだろう。また，蜘蛛や狸が最初に登場した際，空腹の状態が続けば，死が待ち受けているという結末も想像できる。こういう意味でその〈飢餓〉による生と死をめぐる生存の問題も存在することは確かである。しかし，それを宿命的な悪とみなすのが適切かどうかは疑問である。さらに蜘蛛が裕福になって幸せそうな家庭を持つようになっても，なめくぢや狸を見返すために，引き続き競争を続けることを，まだ生存の問題として処理するのが適切かどうかも疑問である。

三，競争の性質の変化

前項で小沢説と萬田説及び川島説を検討してきたが，それぞれ納得いくところもあれば，行かないところもある。とくに競争への批判や〈飢餓〉をめぐる生存の問題などについてそれぞれの言い分があるように思う。何故こうしたことを生じたのだろうか，それぞれの論考で何が見落とされたのだろうか。

繰り返しになるが，もう一度前述の先行論考を整理してみよう。小沢は競争に目を向け，その競争原理の否定が資本主義社会への否定と繋がっていると見ている。そこは〈飢餓〉という状態による生存危機，それが競争の原動力の一つであるということには目を向けなかった。一方作品の基底に〈飢餓〉が据えていることを認め，極度の〈飢餓〉の状態に注目するのは萬田説と川島説である。ここで萬田説に関する検討はさておき，主に川島説をもう一度確認しておきたい。氏は残酷な自然条件が生き物に〈飢餓〉という生存危機に突き落とし，そのなか，生き物たちはお互いに食い殺さなければならないという宿命を負わせられる。その生存の非条理に賢治の批判のベクトルが指していると主張した。が，根本的な生存問題と遠く離れているところ，つまり虚栄心のために行われた競争及びそれによる滅亡のドラマには目を向けなかった。つまり，両氏とも，競争の性質の変化に気がつかなかったのである。以下でテキスト内部から競争の性質の変化を確認して行きたい。

まず，蜘蛛の場合から見てみよう。

蜘蛛が風に飛ばされて楢の木に引っかかった際は，「ひもじくておなかの中にはもう糸がない位」だった。やっと「二銭銅貨くらいの網」をかけたが，空腹の時掛けたものなので，糸に粘りがなく，飛んでくる蚊に切られそうになった。お腹から吐き出した糸で掛けた網に引っかかった昆虫などを餌にするのが蜘蛛の生存方式だとするなら，その糸が生命維持に大変重要な役割を果たしていることが言える。が，その時の蜘蛛は生命維持するための重要なものも失う寸前である。その時の蜘蛛がまさに生存の危機に直面していると言える。

その貧しい網に最初に引っかかったのは一匹の蚊である。蚊が泣きながら謝ったが，「蜘蛛は物も云はずに頭から羽からあしまで，みんな食ってしま」った。二番目にやってきたのは，めくらのかげろうである。蜘蛛はかげろうを騙し捉えて，食い殺した。餓死寸前の蜘蛛にとって一番の関心事は餌を得ることであり，義理人情は彼には通じない。この時の行為は，小沢がいった「自分の食欲」を満足するためであるより，むしろ生きて行くため，いわば生存の欲望によるものである。

が，そのうち「網は三まはり大きくなって，もう立派な」巣になり，そこで蜘蛛が「すっかり安心し」た。ここから蜘蛛はすでに最初の生存危機の時期を乗り越えたと言える。

その後，蜘蛛は結婚し，たくさんの子供を生み，虫けら会の相談役にも推された。夫婦二人で「葉のかげにかくれてお茶を」飲んだり，網の上で「すべったり，相撲をとったり」して賑やかに遊んでいる子供らを眺めたりする蜘蛛の姿は，前の「葉のかげに戻って，六つの眼をギラギラ光らせてじっと網をみつめ」，餌が来るのを見張っている緊張感あふれる姿とは鮮明なコントラストを成している。ここまで来て，生存危機を乗り越えたどころか，名誉も裕福も手に入れた幸せ絶好調な境地に居るようになった。

ところが，その時蜘蛛に大きな転機が訪れた。彼を妬んでいるなめくぢや狸が悪口を言いに来た。彼らの悪口を聞いて，おかみの蜘蛛が「くやしがって，まるで火がついたやうに泣き」，蜘蛛も「『一生のうちにはきっとおれにおじぎをさせて見せるぞ』」，と彼らを見返す決心をした。

それがきっかけに，蜘蛛は「もう一生けん命であちこちに十も網をかけたり，夜も見はりをしたりし」た。最初の一生懸命な働き振りとは違って，今度のそれはすべて見栄のためである。最初のがんばる姿を生存競争だと名づけても構わなければ，今の競争は既にそれと地平が違って，あくまでも虚栄心のための，無用な競争だと名づけるしかな

い。つまり，競争の性質はすでに生存のためから，虚栄のためへ，と変化した。

なめくぢの場合は登場した当時からすでに立派な家を持っている。生存の危機とは無縁なところにいることは容易に想像できる。にもかかわらず，かたつむりやとかげを食い殺した。そこは弱肉強食の世界ではあるが，生存危機を乗り越えるための競争は見られない。そしてなめくぢが「あんまり大きくなったので，嬉しまぎれについあの蜘蛛をからかった」が，かえって，蜘蛛に嘲笑され，「熱病を起こし」てしまった。その後も狸にあざけられ，再度病気になった。そのうち，蜘蛛が「腐敗して雨に流れてしま」ったことで，なめくぢは「少しせいせいし」た。大きくなることでそれほど嬉しくなり，しかもそれを自慢げに他人をからかうこと，他人を意識し，他人の死を期待しているかのようなことは見栄によるものだとしか言えない。ここでの競争の性質は虚栄心によるものに属し，前後の変化は見あたらない。

次は狸の場合を見てみよう。

「狸は丁度蜘蛛が林の入口の楢の木に，二銭銅貨位の巣をかけた時，すっかりお腹が空いて一本の松の木によりかかって目をつぶって」いた。狸の登場も蜘蛛と同じく空腹でたまらない状態であった。そこへ，同じく〈飢餓〉に耐えられなさそうな兎がやってきた。狸の日常営為は多分嘘の祈禱をやって，小動物を騙し食うことだろう。今度兎も例外なく狸に騙され，食べられてしまった。ここで〈飢餓〉のイメージが蜘蛛，なめくぢの場合よりいっそう強い。つまり，殺す側のみならず，殺される相手も〈飢餓〉に耐えきれない状態にいるのである。こうした極度の〈飢餓〉状態での食い殺す行為は生存の危機を乗り越えるために行われたことだと言えよう。が，その後，狸は大きくなった蜘蛛やなめくぢの悪口を言ったりした。それは嫉妬によるものに間違いなかろう。後の狼を騙し食う場合は既に生存競争の地平を越えて，まさに大きくなろうという無制限に拡大する欲望による行為と言えるだろう。お互いに競争心を起こした挙句，狸も蜘蛛やなめくぢと同じく破滅の運命を迎えた。以上見てきたように，狸の場合にも，最初の生存のための競争から後の虚栄心による競争への変化が見られる。

以上のように，なめくぢの場合を除けば，蜘蛛と狸の場合は生存危機に直面する際の生存競争から，生存危機を乗り越えたにもかかわらず，嫉妬や見栄のため無限に拡大する欲望による競争へ，と競争の性質の変化が確認された。よって，視線を片方のみに向けるのではなく，競争の質の変化に意識しつつ，それに基づき，より充分な作品評価を下すことができるのではないかと思う。

四，現実性と感傷性との対立構図

前述のように〈飢餓〉という事項が作品のなかに大きなウエートを占めている。従って，それをめぐる問題も重要なものだと思う。しかし，〈飢餓〉によって生じたものが悪であるかどうかは疑問である。それが悪であるかどうかを判断する前に，まず，その〈飢餓〉の状態で，みんなそれぞれどう対処したかを見る必要があると思う。

まず蜘蛛の場合から見てみよう。

蜘蛛が森の入り口の楢の木にひっかかったのは風に飛ばされて来たからである。蜘蛛にとって，風はまさに自然災害のようなもので，恐らくその風で命を維持するためにかけた網も破られ，空腹のまま見知らぬ場所に吹き飛ばされたのであろう。が，蜘蛛は「ひもじいのを我慢して，早速お月様の光をさいはひに，網をかけはじめ」た。あまり空腹のため，お腹の糸がもうないくらいだが，蜘蛛は「『うんとこせうんとこせ』と云ひながら，一生けん命糸をたぐり出して」(下線――筆者注，以下同)，やっと小さな網をかけた。引っかかってくる餌を食べたら，すぐ，「葉のかげに戻って，六つの眼をギラギラ光らせてじっと網をみつめ」，次の獲物の到来を待ち伏せる。ここから自然災害に屈せずに生存の危機を乗り越えようと一生懸命生きていく姿が読み取れるのではないか。

加えて，蚊に謝られても，「物も云はずに頭から羽からあしまで，みんな食って」しまうシーンがあるが，そこから獲物を食い殺す残酷さを読み取ろうとすれば不可能ではないが，それより少し前の蜘蛛が生きていくために一生懸命がんばって網を張る姿とを考え合わせると，それを残酷さというより，むしろ蜘蛛の現実性と見るのが妥当かもしれない。前述のように網を張り，蚊などの昆虫を獲得するのが蜘蛛の日常生活行為であり，とくにその〈飢餓〉状態のなか，獲物を逃したら，自分の命が危なくなる，といった現実を，蜘蛛はすっかり見極めただろう。従って，その場面で，何も言う必要はなく，目の前の獲物を捉え，早速空腹感を克服するのは，現実性を見極めた蜘蛛にとって，それが当然な行動であると言える。

その後，蜘蛛の網がだんだん立派になったが，「時々風にやぶれたりごろつきのかぶとむしにこわされたりし」たこともある。前述のように，風は最初から蜘蛛の天敵のような存在であり，今度甲虫も蜘蛛にとって好ましい存在ではないことが分かる。が，これらの災害に面して，蜘蛛は何も言わずに，「すぐすうすう糸をはいて修繕し」た。

また，災害はこれだけではなく，「二百疋の子供は百九十八疋まで蟻に連れて行かれたり，行衛不明になったり，赤痢にかかったりして死んでしま」った。しかし，「子供らは，どれもあんまりお互ひに似て」いたので，「親ぐもはすぐ忘

れてしま」った。ここから親蜘蛛の冷酷さを読み取っても無理はないが，この部分に続き，次の描写――「そして今はもう網はすばらしいものです，虫がどんどん引っかゝります」――に注目したい。前にも触れたように，一連の災害に面して，ただ運命を嘆くのではなく，早速次の一歩を踏み出すのが蜘蛛の習性である。この場合も恐らく，死んだ子供をいつまでも思うより，はやく網を立派にし，獲物をどんどん獲得すれば，そのうち自然にまた子供に恵まれると思っているだろう。蜘蛛はまさに究極な現実性に生きるものであろう。

狸の場合にも同じ事が指摘できる。

このような現実を見据えた蜘蛛，狸たちに対して，食い殺されたもの達は如何に振舞ったのかを見てみよう。

蜘蛛に捕らえられた蚊は「『ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。』と哀れな声で泣」いた。同じく蜘蛛に噛み付かれためくらのかげろうは「『あはれやむすめ，父親が，旅で果てたと聞いたなら』と哀れな声で歌ひ出し」た。注目したいのは，両者ともやられた時に哀れな声を出すことである。弱い立場に居ることは明白であるが，彼ら自身もそれに気づいているのである。さもないと，哀れな声を出さないだろう。生命の危機に面して，彼らがとった唯一の行動は哀願することであり，弱者として同情すべきところもあるが，その対処の仕方はあまりにも感傷的で，蜘蛛の行動と対照となっていると言える。

加えて，かたつむりは食べ物に困っているから，「林の中では一番親切だといふ評判」だったなめくぢのところに助けを求めに来たのである。食事が与えられたため，なめくぢに相撲を強要されても，仕方なく「私はどうも弱いのですから強く投げないでください」と弱音を吐きつつ，無理して応戦した。結果は勿論なめくぢに食べられてしまったのである。

同じくなめくぢに助けを求めてきたのはとかげであった。とかげは蛇に噛まれ，「びっこをひいて」きたのである。なめくぢに騙され，なめてもらうことにしたが，体が少しずつ溶け，どうすることもできず，ただ「泣き声を出し」て嘆願するだけだった。

かたつむりやとかげは来る前にすでに「困っている」境地に居り，助けを求めになめくぢのところに来たのである。他人の善意を信じて，助けを求めに来るということはある意味で，彼らの危機に対応する仕方の甘さを示唆していると言える。現実はなめくぢは彼らの信頼に値するものではない存在であるどころか，逆に彼らの命まで奪ってしまう大変危険な存在であることは後の筋の展開で分かる。ここから彼らの現実世界に対する認識の幼稚さが窺える。さらに生命の最後の一刻で，彼らが生きている世界との別れ言葉はただ泣き声でしかない。それは感傷的な行動と言えるしかない。

次に狸にやられた兎と狼の場合を見てみよう。

兎が狸に祈禱を頼んだのは，〈飢餓〉に死にそうな時であった。狸の嘘の祈願に騙され，体がだんだんかじられつつも，「たいへんうれしくてボロボロ涙をこぼして，（中略）『なまねこ，なまねこ。あゝありがたい，山猫さま。私のやうな悪いものでも助かりますなら耳の二つやそこらなんでもございませぬ。』」と喜びを感じながら言った。信仰心の篤さが窺えるが，死ぬ前に祈禱を頼むこと自体はそもそも死後，極楽世界に行きたいという願いから発想されたものであり，現実には何の役にも立たないことである。こういった意味で兎の行動が非現実的であると言える。同じく祈禱を頼みにきた狼の場合にもその非現実性が見られる。

以上見てきたように，生存の危機に直面する際に，蜘蛛らが取った行動は，積極的現実的であるに対して，やられた蚊や兎たちが取ったそれは，感傷的非現実的である。蜘蛛らのたくましい生きて行く姿からは，〈飢餓〉をめぐる生存の様相が悪とは見えないだろう。勿論そこには強者と弱者の関係も見られるが，それは〈飢餓〉によって発生したものではなく，現実の世界はもともと弱肉強食な世界であり，〈飢餓〉の状態に陥る場合，それが一層明白な形になって立ち現われてくるだけのことである。

そのような現実世界を見極められなかった蚊やかたつむりなどはやられ，消えていくが，現実をありのままに引き受け，たくましく生きて行く蜘蛛たちも何らかの形で破滅してしまう。まさにディストピアの世界の出来事であろう。非現実に生きているものたちはいつか現実の壁にぶつかり，消えていくものであるが，現実的に生きているものたちも破滅してしまうのは何故であろう。以上見てきたようにそれは必要以上の競争をした結果だと言うしかない。つまり，生存のための競争ではなく，生存危機を乗り越えても，見栄の為にしつづける競争こそが，蜘蛛らの破滅の原因であり，それが否定されるべき悪であることが明らかになるだろう。

五，「蜘蛛となめくぢと狸」から「寓話　洞熊学校を卒業した三人」へ

「蜘蛛となめくぢと狸」は後年[8]「寓話　洞熊学校を卒業した三人」へと改作された。ここでは二つの作品の異同を比較し，前者から後者への改稿の方向性を把握したい[9]。便宜上のため，前者を「蜘蛛」，後者を「洞熊」と略称することにする。

両作品の主な相違点をまとめておくと，以下の通りになる。

1，「蜘蛛」ではなかった蜂の情景が季節ごとに書き加えら

れた。

2，「蜘蛛」においての狸に食われる兎がただ悔しがる場面が，「洞熊」では兎が騙されないようにみんなに呼びかけるシーンに，書き改められた。

3，「蜘蛛」でのなめくぢが雨蛙に塩をまかれ，且つ食われるシーンが，「洞熊」では雨蛙がなめくぢに塩をまいた後食わずにその場を去って行く，というように書きかえられた。

4，「洞熊」では学校の設定が増えた。

まず，1について詳しく検討を加えてみよう。

蜂の春夏秋冬四季の生態は季節ごとに，序と三人の物語を記録した三章のそれぞれの結末のところに挿入された。

> ちゃうど〔〕そのときはかたくりの花の咲くころで，たくさんのたくさんの眼の碧い蜂の仲間が，日光のなかをぶんぶんぶんぶん飛び交ひながら，一つ一つの小さな桃いろの花に挨拶して蜜や香料を貰ったり，そのお礼に黄金いろをした円い花粉をほかの花のところへ運んでやったり，あるひは新しい木の芽からいらなくなった〔蠟〕を集めて六角形の巣を築いたりもういそがしくにぎやかな春の入口になってゐました。

これは春の季節で，蜘蛛ら三人が洞熊学校で競争の原理を学んだ時期と重なっている。ここの蜂の生活様式にはある特徴が見られる。それは蜂と花や木などの自然界との間は調和連帯関係で結ばれていることである。蜂の生活営為は花の蜜を採取して，それを栄養源に生きて行くことであるが，その行為が無意識のうちに花粉伝播の役割も担っている。なお，巣を作るために集めてきた蠟もちょうど木が要らなくなるものである。蜂と周囲とのかかわりは無意識にせよ，見事な共生関係であり，蜘蛛らの競争関係と正反対で，両者が好対照となっている。

その後蜘蛛ら三人が学校を卒業して，それぞれの家に帰って，習得した競争の原理を日常生活のなかで実践した。その結果，三人とも地獄に辿り着いた。

一方，蜘蛛が食物を貯めすぎて，腐敗して雨に流れてしまった時は，ちょうど「つめくさの花のさくころで，あの眼の碧い蜂の群は野原ぢゅうをもうあちこちにちらばって一つ一つの小さなぽんぽりのやうな花から火でももらふやうにして蜜を集めて居りました」。また，なめくぢが雨蛙にやられた時はちょうど「秋に蒔いた蕎麦の花が，いちめん白く咲き出したときでその眼の碧いすがるの群はその四っ角な畑いっぱいうすあかい幹の間をくぐったり，花のついたちいさな枝をぶらんこのやうにゆすぶったりしながら今年の終わりの蜜をせっ〔せ〕と集めて居りました」。最後に，狸が病気にかかり死んだ時は「もう冬のはじまりでその眼の碧い蜂の群はもうみんなめいめいの蠟でこさえた六角形の巣にはいって次の春の夢を見ながらしづかに睡って居りました」。蜘蛛ら三人の悲惨な結果と反対に，蜂たちは豊かな収穫を得，甘い夢を見ることができる幸せな生活を手に入れた。これは共生の原理に従う行動による幸福の獲得だと言えよう。

さらに，2について見てみよう。

「蜘蛛」では，兎が狸に食われて，「すっかりだまされた。お前の腹の中はまっくろだ。あゝくやしい」と喚くだけなのに対して，「洞熊」では，兎が死ぬ直前に「みんな狸にだまされるなよ。」と他人に呼びかける行動に至った。「蜘蛛」での喚きが個人的なものにとどまっているに対して，「洞熊」での呼びかけはすでに他人との連帯，共生を意味するようになったではないか。

以上検討してきたように，1と2の改稿によって，共生の構造が書き加えられたことが分かった。

横山明弘[10]は共生の構図の存在を指摘したが，共生構造の加筆の意味についてはただ競争との対比をなしているといった指摘にとどまった。筆者は競争と共生との対照関係を書き加えたのは，競争への批判のためであり，しかも，批判のみにとどまるのではないと思われる。したがって，更なる意味があると想定して，検討を加えてみたい。

先の蜂に関する引用文の中に，留意しておきたいのは蜂の眼についての描写である。その眼は碧色でしかも蜂の大きな特徴としてたびたび描き出された。実際の蜂の眼がどのような色であるのかはともかく，賢治文学のなかでは，碧い眼をするものが数多く描き出された。大塚常樹[11]の論考によると，それが聖なるものの象徴であることが分かる。それを踏まえて蜂たちの生活振りを考えると，その調和的な生活様式及びそれによる手に入れた幸せな結末が，聖なる領域に属する出来事のようなもので，その世界が一種の憧れのユートピアであるといえる。共生の構造が加筆される意味は競争との対比による競争への批判にあると同時に，このようなユートピアの暗示にもあるではないか。それが実現できるかどうかはともかく，ここにユートピア志向の提示に重要な意味があることを指摘しておきたい。

次は3について考えてみたい。

「蜘蛛」ではなめくぢが雨蛙に撒かれた塩で体が溶けてしまって，最後に雨蛙に食われてしまう結末であるが，「洞熊」の場合は撒かれた塩でなめくぢが溶けてしまうまでは「蜘蛛」と変わらないが，最後に雨蛙がなめくぢを食わずに，「わたしもうちへ帰ってから，たくさん泣いてあげますから」という捨てゼリフを吐いて，退場した，というところに「蜘蛛」との大きな相違点が見られる。つまり，雨蛙がなめくぢを食うためではなく，かれに罰を与えるために登場したように改稿された。そこに処罰の構造が読み取れる。

では，「蜘蛛」において処罰の構造が存在するかどうか，もう一度確認しておこう。なめくぢが他人を騙し食い，結局自分も他人に騙し食われる，それが処罰だと読み取ろうとするのは，無理なことではない。しかし，食う食われる構造が存在するとはいえ，それ自体が悪事として描かれているわけではない。むしろ生存のためである場合にそれが容認さえされているとも言える。ゆえになめくぢが食われるのを悪業に対する処罰と見るより，むしろ，競争に燃えすぎたあげく，一時油断して失脚した結果だと見るのが妥当かもしれない。さらに，もし蜘蛛ら三人が死んだという結末を，自然の摂理による競争への処罰だと言うなら，少なくとも「洞熊」でのような人為的な処罰は見られない。

以上のように，「蜘蛛」では人為的な処罰が存在しないが，「洞熊」ではそれが加筆された。このような加筆によって，善と悪の峻別が一層明確になり，悪の行方を明示するとともに，善というもう一つの世界の可能性も暗示されている。

最後は4について。「洞熊」の題名が示したように，「蜘蛛」において現われなかった学校が「洞熊」で登場し，しかも大きな役割が担わされている。今までの論究ではこの点はほとんど注目されなかったが，筆者はこれが改稿における一番重要な個所だと思われる。以下で詳しく検討を加えて行きたい。

「蜘蛛」では蜘蛛ら三人が「本気な競争をしていた」そうだという伝聞から書き出したが，学校のことは一切現われなかった。対して，「洞熊」の場合は，最初から三人が洞熊学校に入ったということから物語が始まった。

> 洞熊先生の教へることは三つでした。
>
> 一年生のときはうさぎと亀のかけくらのことで，も一つは大きいものが一番立派だといふことでした。それから三人はみんな一番にならうと一生けん命競争しました。

三人が学校で競争の原理を教わり，早速学校での競争を始めた。蜘蛛は単に遅刻しないというだけで，なめくぢは先生の計算違いで，狸はカンニングで，三人は年毎に首席の座を交替した。これについて小沢の「競争すべき基準を失った競争のための競争の空しさが批判されている」[12]との指摘は妥当であろう。学校を卒業してからも，三人は引き続き日常生活で競争の原理を実践した。

両作品には競争するという点に関しては大きな相違がないが，競争の原理が学校から学んだものだという設定が「洞熊」に書き加えられた。それは何を意味するだろう。「蜘蛛」では，その競争は人間内部の欲望によるものであるが，「洞熊」の場合はどうだろう。

勿論，「洞熊」でも，人間内部の欲望による競争要素が完全に姿を消したわけではない，それは大きくなった蜘蛛をなめくぢや狸が妬んで悪口を言うことからも分かる。つまり，人間内部に潜んでいる嫉妬といった感情形式が競争の起因にもなれるのである。しかし，「洞熊」において競争の起因になるものがやはり学校で学んだ競争原理であることは明白である。しかも，学校という装置を通して，もともと人間内部に潜んである欲望が学校で教えた内容と一致する場合は，その欲望が顕在化され，なお合理化されるようになる。つまり学校という設定の加筆によって，三人が行った競争は一層激化され，しかも正当化されたのである。

では，作品成立当時，実際の学校はどのようなものだったのか。次は日本における近代学校について調べてみよう。

近代日本の学校制度は明治新政府によって創設された。近代の国家，社会の成立に伴って，全国各地で郡程度の広さを単位として成人にいたるまでの教育を行う学校圏，教育圏の形成が進行し，大正時期に人々を強力に拘束する全国画一の学校価値観，学校制度が成立したと考えられている[13]。

なお，国家規模での義務教育制度の成立にともなって，学校教育は国家と社会の存続と発展にとっても，要の位置を占めるものとなってきた。学校という制度は世代更新にかかわる社会の諸機能が「分化」して成立したものであり，その意味では，つねに政治・経済・社会・文化の諸領域からの影響や規定を受ける存在である。それは〈社会的被規定性〉と名づけられている。さらに制度としての学校に内在するこの〈社会的被規定性〉は，たとえ個人の教師がどんな考え方を主観的には持っていても，学校教育の構造そのものに埋め込まれた本質的な機能であると言われている[14]。

以上見てきたように，制度としての学校は明治時代に創設され，大正時期になって国家規模の強力な学校制度が定着した。学校の主な特徴としては社会的被規定性である。つまり，学校はただ一つの装置として，国家や社会のイデオロギーの浸透に役立つのである。「洞熊」に即して言えば，蜘蛛らが学校で習った競争の原理はただ学校範囲内のものではなく，国家や社会というより広範囲で通じられるものであり，しかも，それでもって社会に出向かうしかない唯一の強制された行動原理でもあると言えよう。特に個人内部の欲望とこの社会原理と共振する場合，競争の度合いが白熱化するのである。要するに，「洞熊」での学校という設定の加筆が作品に社会性を織り込んできたと言える。これが改稿によって産出された大きな特徴であろう。

1から4まで改稿の主な点をまとめてみると，改稿によって，変わったのは共生構造や学校設定などが書き加えられることであり，変わらなかったのは競争の構造である。

共生の構造などの加筆によって，生の可能性が閉ざされたディストピアの様子を見せた「蜘蛛」の世界と違って，「洞熊」では，ディストピアの世界以外の，共生の夢がかなえられる，生の可能性が示されているユートピアの世界の存在も垣間見せてくれた。また，学校という設定を書き加えることによって，学校の背後にある社会，制度の問題が浮上し，作品の社会性が増し，小沢の社会批判の論旨は「蜘蛛」より，むしろ「洞熊」には通用するだろう。

おわりに

以上検討してきた幾つかの点をまとめてみたい。

まず，作品において，競争の性質の変化，つまり生存のための競争と単なる見栄のためのそれが存在することが確認された。先行研究はこの競争の性質の変化に目を向けなかったため，小沢説のごとく，蜘蛛らの総ての行為を資本主義の競争原理に照らし，それへの批判が隠されていると見なされたり，あるいは川島説のように生存のみに注目し，生存をめぐる宿命的な悪のドラマだと見なされたり，といった論考が生じたのである。

また，作品に現実的に生きるものたちと感傷的に生きるものたちとの対立構図の存在も確認された。特に蜘蛛が生存危機を乗り越えるために一生懸命生きて行く姿と，捕らえられ，哀れな声を発したり，餓死直前に信仰に身を投じたりするものたちとの姿とは好対照を成している。しかし，現実的に生きて行くものたちまで，すべてのものが破滅の結末を免れなかった。それはディストピアの世界そのものである。その理由については過度かつ無意味な競争に帰されている。勿論生存に関する競争はこの作品の中でむしろ容認さえできるものとされている。

さらに，後年改作された「洞熊」との比較によって，以下の問題が明らかになってきた。まず，現実的であれ，非現実的であれ，いずれも滅亡して行くという生の可能性が閉ざされた「蜘蛛」の世界と違って，「洞熊」の場合は調和的，共生の生活様式が理想的なものとして提示される。「洞熊」と比べて，「蜘蛛」のディストピアの性質が一層際立ってくる。なお，「蜘蛛」では，その競争が単なる人の欲望によるものであるのに対して，「洞熊」では，それが個人レベルのものをはるかにこえて，学校で学ぶほどの，社会が承認する，しかも人々がそれを行動原則にするべき，社会原理にまでなっている。勿論「洞熊」では個人の欲望による競争が消えたわけではなく，個人欲望と社会原理が共振するわけであり，その結果，競争の度合いが白熱化する一方である。学校に関する加筆によって，「洞熊」のほうが，「蜘蛛」より社会性が目立ってきた。

以上のことを言いかえれば，「洞熊」との比較によって，「蜘蛛」のディストピアの性格が強く打ち出され，なお，その起因が外部社会にあるのではなく，人間内部に潜んだ無限大に拡張する欲望にある，ということは一層明らかになった。

1　『校本宮沢賢治全集』第14巻（筑摩書房　1977，10）の年譜によれば，大正７（1918）年８月の頃に，弟宮沢清六の記憶として，この夏に「蜘蛛となめくぢと狸」「双子の星」を語り聞かされたとし，次のように回想された。
「処女作の童話をまっさきに私ども家族に読んできかせた得意さは察するに余りあるもので，赤黒く日焼けした顔を輝かし，目をきらきらさせながら，これからの人生にどんな素晴らしいことが待っているかを予期していたような当時の兄が見えるようである。」

2　小沢俊郎「『蜘蛛となめくぢと狸の話』から――『洞熊学校を卒業した三人』へ」（続橋達雄編『宮沢賢治研究資料集成』第18巻　日本図書センター　1992，４）368頁～369頁参照

3　前掲論文372頁

4　天沢退二郎『写真集宮沢賢治の世界』（筑摩書房　1983，９）167頁

5　前掲論文378頁

6　萬田務「賢治童話の成立」（『孤高の詩人　宮沢賢治』新典社　1986，10初版　1990，５第５版）117頁

7　川島裕子「賢治童話の出発――そのモチーフをめぐって――」（『KYORITSU REVIEW』第16号　共立女子大学大学院文芸学研究科　1988，２）４頁～５頁

8　『別冊国文学宮沢賢治必携』（№6　佐藤泰正編　学燈社　1980，５）によると，改稿時期は大正13（1924）年以降と推測されている。

9　小沢俊郎が前掲論文で二つの作品の異同について詳細の考察を行った，本論はその多くを負っている。

10　横山明弘「宮沢童話における構造的研究１――弱肉強食から自己犠牲へ――」（『人文科教育研究』16号　筑波大学　1989年）27頁

11　大塚常樹『宮沢賢治　心象の記号論』（朝文社　1999，９）264頁～269頁参照

12　前掲論文371頁

13　土方苑子『近代日本の学校と地域社会――村の子どもはどう生きたか――』（東京大学出版会　1994，９）１頁，237頁～238頁参照

14　『学校とはなにか』（堀尾輝久他編　柏書房　1995，12）８頁，66頁～68頁参照

尚，本文引用は，「蜘蛛となめくぢと狸」は『新校本宮沢賢治全集』第８巻（筑摩書房　1995，５）に，「寓話　洞熊学校を卒業した三人」は同全集第10巻（筑摩書房　1995，９）に拠った。ルビは省略した。